



おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師、経営学修士(MBA)、新潟郷土史研究会会員
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）
「郷土とことわざ」「ことわざを楽しく学ぼう、社会・文化・人生」（人間の科学新社・共著）
「明治大学政経論叢 2016年度（新潟美人）」
（明治大学政治経済研究所）等

「がめくり」

「一つ食べばうまいもの
二つ食べば舌が抜ける
三つ食べばがめくりになる」

これは、恐らく、あまり（というかほとんど）知られていない格言めいたことばです。かつて、旧西蒲原で採取してから、時折思い出したように調べてはいたのですが、知る人は県内で皆無、もちろん県外でも見当たらない、おまけに辞書にも載っていない、という稀少語のため、そのまましじらほじららにしておりました。しかし、このままでは「死語」になってしまいますので披露いたす次第です。

さて、改めて口にしてみるとこのことばからは、山海の珍味に贅を尽くした美食は、適量でこそ美味なるもの、というように、何事も過ぎたるは及ばざるが如しである、ほどほどにしなせや、との戒め感が伝わってきます。

確かに、海のものでも山のものでも、天然ものでも加工ものでも、固体でも液体でも美味しいものは旨い！かといって一杯、二杯、また一杯、一尾、二尾、また三尾と、いっぺこと口にすればするほど、最初の一口の感動は薄れていくものです。

うまいのは一口目、二口目は舌が抜けるとは、また大げさですが、まるで閻魔様に舌を抜かれるという話を連想してこりゃおおごとだ、という感じです。三口目の「がめくり」（後述するので待ってね）ということばが解らなくとも、そのおおごと感は大変なものということがひしひしと伝わってきて、まさに言িয়েて妙な郷土の格言といっても良いでしょう。

ところで、この三口目の「がめくり」ですが、こ

のことばにも大変大変、往生させられました。新潟の方言の「がめる」（盗むという意）にも似ています。がめる→がめくりでがめる人、つまり盗人という意味？コガネムシの新潟（主に下越）の方言「ガメ」とも関係か？我（が）をめくる？盗人になる？コガネムシが来る？どれも意味を成しません。

九州地方に「がめ煮」という郷土料理がありますが、なんでもかんでも食材を入れて煮込むという意味のがめ（煮含めるの意で含め→がんめががめになった？）ともあまり関係ないようです。ああでもない、こうでもない、と調べてみたところ、がめくりとは、坊主という新潟の方言でした！食べ過ぎると坊さんになる？これでは、朝な夕な仏に仕える身の（多分）お坊さまに失礼というものです。仏教界怒ります。おそらく坊主はあちらの方、仏に仕える坊さんではなくて、頭の状態を表す「坊主」ががめくりであったと思われます。

私の髪がづるりと捲れて「が（我）めくり」ということでしょうか？

舌が抜けても、髪が抜けても一大事！食も欲も行いも人間何事もほどほどが一番！という教えを示唆してくれる有難〜い郷土の格言です。

